

高等学校

平成 17 年 度

教育研究員研究報告書

地理歴史・公民

東京都教職員研修センター

目 次

I 主題設定の理由	
1 研究主題について	2
2 研究内容与方法	2
3 授業指導演を檢討するにあたって	3
II 内容	
1 世界史	3
(1) 内容設定の理由	
(2) A校世界史A学習指導演	
(3) B校世界史B学習指導演	
(4) C校世界史B学習指導演	
(5) D校世界史A学習指導演	
(6) 検証授業 (C校の實踐とまとめ)	
(7) 各校の分析と考察	
2 日本史	12
(1) 内容設定の理由	
(2) E校日本史A学習指導演	
(3) F校日本史A学習指導演	
(4) G校日本史A学習指導演	
(5) 検証授業 (E校實踐のまとめ)	
(6) 各校の分析と考察	
3 地 理	18
(1) 内容設定の理由	
(2) 地理における「個に応じた (各学校の特色に応じた) 指導」	
(3) H校地理A学習指導演	
(4) 検証授業	
(5) 分析と考察	
III 成果と課題	
1 研究の成果	23
2 研究の課題	23
3 主体的に考える力の育成と個に応じた指導について	24

研究主題

主体的に考える力を培うための個に応じた指導の一層の充実

～学校の特色を踏まえた指導の工夫～

I 主題設定の理由

1 研究主題について

これまでの研究では生徒の興味・関心を高め、社会的事象や歴史的事象の多面的・多角的考察がなされるとともに視聴覚教材をはじめとする教材や資料の作成及び提示方法の工夫、プリントの工夫等多くの研究がまとめられ、各学校に還元され、授業の充実が図られてきた。本年度の教育研究員においても「学校ですぐに使える」「教員が読んで考えてもらえる」ことに重点をおき研究を進めてきた。

高等学校学習指導要領「総則」の第1款教育課程編成の一般方針の1には「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」とあり、加えて「地理歴史」及び「公民」の目標からも、基礎的・基本的な学習に立った主体的かつ生徒一人一人の個に応じた学習が求められていることがわかる。

しかし、高等学校では「一斉講義型」「知識注入型」の授業がまだ多く展開されており、求められている学習の在り方が広く達成できないでいる。また、各学校では、生徒・保護者や地域の要請に応じた特色ある学校づくりを進めているところである。このような状況を踏まえ、教科の目標を達成するとともに、生徒の「自ら考える力」を育成するためには、指導内容の検討を進めるとともに指導方法の工夫とその共有・継承も一層進める必要がある。

そこで本部会では、研究主題を「主体的に考える力を培うための個に応じた指導の一層の充実」に設定した。また、各学校に学ぶ生徒の能力や適性は、相互に共通する部分があるとはいえ、決して同じではない。各学校で学ぶ生徒の能力や適性に応じることは、教育活動の基本であり、教育効果を一層高める鍵となる。各学校が生徒の特性に焦点を当て、諸条件や外部環境の動向などをとらえ、生徒の成長を最大限に図ろうとする取り組みの積み重ねによって教育活動を展開しようとするほど、それぞれの学校は独自の特徴をもつことになる。つまり各学校が自校の課題や特性をしっかりとらえると同時に、教職員がその課題や特性を共有し、個に応じた授業展開をすることで指導方法の工夫と共有化を図ることができる。そこで、研究主題の副題を「学校の特色を踏まえた指導の工夫」に設定した。

2 研究内容と方法

(1) 個に応じた指導に関する具体的な研究

文献などを研究するとともに、以下のとおり実践的な研究を行った。

- ① 各研究員が考える「個に応じた指導」あるいは「学校（生徒）に応じた個に応じた授業の展開」について2～3行程度でまとめる。
- ② ①の考えに基づいた授業展開を夏季休業日が始まるまでに実践する。（1単位時間）
- ③ 可能であれば、②で実践した授業について「生徒による授業評価」を実施する。

④ 夏季集中の例会の際に研究協議を行う。

この結果、「個に応じた指導」、「学校及び生徒の実態に応じた授業展開」が大切であるとともに、「生徒が主体的に考える授業」が地理歴史・公民科のキーワードとなることが確認された。

(2) 指導案の作成及び検証授業

世界史、日本史、地理の3分科会に分かれた。下記「3 授業指導案を検討するにあたって」に示す共通認識に基づいて分科会の各研究員が所属する学校での指導案を作成し、検討した。各研究員は、この指導案と夏季集中の例会での研究協議を基にして9月以降に授業及び生徒による授業評価を行い、報告書に掲載することとした。研究員全員で検証授業を観察したのは2回（世界史、日本史）であった。この2回については、月例会において全体協議を行った。

(3) 検証授業の分析

検証授業については以下の視点で分析し、全体協議を行った。

- ① 個に応じた指導がどのように展開されているか。
- ② 各学校や生徒の実態に応じた授業内容であったか。
- ③ 生徒が主体的に学習を進めていくための工夫はどのようなものであったか。
- ④ 上記①～③について実際の授業における生徒の反応等を中心に、指導案とともに分析した。

(4) 分析結果のまとめ

分析結果から「個に応じた指導の展開」「学校の実態や特色に応じた指導の在り方」「生徒が主体的に学習を進めていくための工夫」についてまとめる。

3 授業指導案を検討するにあたって

個に応じた指導の一層の充実を図るために、授業の展開方法に関することと、科目相互の連携に関する研究を行うことに一定の意義があるというのが本研究員の共通認識となった。ここでは研究員が所属する各学校の課題を踏まえながら、個に応じた指導の実際を比較、考察することで各研究員の共通理解を図るとともに、個の集団である学校とクラス（専門学科や課程、選択クラス等）に応じた指導の在り方について次の視点をもって検討することとした。

「世界史」「日本史」「地理」が共通で扱える視点として、都立高校が「首都・東京」という場にあることから「東京」を地域的広がり素材とした。また、時間軸としては各科目が素材を共有できる1世紀前を中心とすることが適切であるとし、「東京」と「1905年」を各科目の共通キーワードとすることで各研究員の考えが一致した。具体的には、世界史と日本史の両面にまたがる「日露戦争」を中心に、その後の社会と今日の東京とを考えることとした。

II 内容

1 世界史

(1) 内容設定の理由

「世界史」は必修科目であるが、大学入試センター試験の受験者数では「世界史」

より「日本史」「地理」の選択者が多い。

	平成15年度	平成16年度	平成17年度
世界史B	106,537	100,438	93,770
日本史B	157,527	154,742	152,072
地理B	127,391	119,502	109,805

大学入試センターHPより作成

表1 地理歴史各「B科目」のセンター受験者数の推移

（表1）これは、教育課程編成上、標準4単位とする「世界史B」ではなく、標準2単位とす

時分	学 習 活 動	評価の観点に基づく具体的な評価規準	評価の場面・方法
導入 5分	①本時の目標を説明 ②ノートの整理と添付資料の生徒など	①記入状況を自己確認する。 ②ノートが書かれているか。	①ノート確認 ②準備状況の確認
展開 1 5分	①1900年前後の世界の勢力範囲を視覚的に理解する。 ②色分けされた世界の勢力範囲図を確認する。 ③1905年までの世界の出来事を確認する。 ④プリントの年号や事件名を空欄に記入する。	①プリントの年表から事件・戦争名を読み取れたか。 ②既習事項の確認とその関連に気が付くか。ノートへのフィードバック、挿絵資料からの読みとり、国際関係と日英同盟の背景の考察(思考・判断)、国際関係図を作成できたか。(技能・表現)	①学期ごとのノート提出時に添付されたプリント及びノート作成を確認。良いノートを紹介。 ②列強の動きを確認し、国ごとの動きではなくお互いが関連し、目的をもって行動した事を理解する
展開 2 10分	①略図を書き帝国主義列強の動きを理解する。 ②日露戦争が導かれた経緯と背景について、日本、英、米の思惑を考察する。 ③風刺画Ⅰから国際関係を理解する。	①板書から事件・戦争名とその意味を読み取れたか。日露戦争の経緯を再確認する。(知識・理解) ②展開1から風刺画Ⅰの背景を考察できたか。(思考・判断)	①日露戦争の国際関係の重要性を考え国際関係図を完成する。 ②机間指導により作業状況を確認して評価する。
展開 3 15分	①新聞資料等から東京の置かれた情勢を考察する。戦費と税金(人的損害も考える)に関する資料の読み取りとその後の歴史的展開を確認する。 ②1905年と2005年の歴史的位置付けを理解する。 ③日韓や日米、日露といった国家関係とともに国家を越えた資本という力を理解する。	①日露戦争前後の東京の情勢を考察(思考・判断)(軍縮条約、不戦条約への流れを再確認する英文の表記は理解できなくてもよい。) ②写真の人物の判別ができたか。	①インターネット上の資料を読み取り、平和主義の台頭を理解する。 ②平和条約の意味を考え、平和構築の努力の重要性まで考えることができたか。
まとめ 10分	①国際関係を理解し、現在の社会と比較する。日英同盟(対露)と日米同盟の相違など。 ②過去を振り返ることの重要性を理解する。 ③板書事項の整理と世界史Bとの関連 ④入試問題と時事問題などの紹介	①板書事項が理解できたか。	①生徒の取り組みを観察・評価する。

カ 評価

- ① 日露戦争が世界に与えた意味をとらえることができたか。
- ② 帝国主義の展開から世界大戦への流れをとらえることができたか。

(3) B校世界史B学習指導案(普通科)

ア 単元名 「帝国主義戦争 ～日露戦争前後の国際関係～」

イ 単元の目標

- ① 意欲的に授業に取り組み、歴史に対して興味をもつことができる。(関心・意欲・態度)
- ② 当時の国際関係と東京の社会の変化について考察することができる。(思考・判断)
- ③ ワークシート・ノートを作成し、自分の考えを表現することができる。(技能・表現)
- ④ 日露戦争前後の国際関係と国際社会の推移を整理することができる。(知識・理解)

ウ 単元の評価規準及び学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
評価規準 単元の	意欲的に授業に取り組み、単元の内容に興味をもつことができる。	列強の動きを中心とした当時の国際関係の成立と、東京の社会の変化について考察できる。	資料の読み取りやワークシート・ノートの作成を通して、自分の考えを表現することができる。	既習事項を整理するとともに、日露戦争前後の国際関係と国際社会の推移を順序付けて整理することができる。
具体的な学習活動に即した評価規準	①内容に興味をもち、意欲的に授業に参加することができたか。 ②ワークシートやノートを作成することができたか。 ③発問に対して、発言しようとしているか。	①列強の思惑について考察することができたか。 ②市民社会(東京)の変化を考察できたか。 ③国際関係図の作成を通して、日露戦争が二国間紛争ではないことをとらえることができたか。	①当時の列強の思惑を理解した上で、国際関係図を作成できたか。 ②自分の考えをまとめ、発表することができたか。 ③資料から当時の社会の変化を読み取ることができたか。	①重要事項を確実に理解することができたか。 ②日露戦争前の国際関係と国際社会の推移を整理することができたか。 ③日露戦争中の社会の変化について、資料から読み取ることができたか。

る「世界史A」を設置している状況が多くあることによると考えられる。また、「世界史は学習範囲が広く、理解するのが大変だ」、「なじみのないカタカナの人名を覚えるのはつらい」という生徒の声もある。

ところで、大学受験希望者を中心に「世界史B」を必要とする生徒は多い。そのため、授業内容も生徒に考えさせることよりも、板書中心の一方的な一斉授業に陥っているという実情もある。個に応じた指導を進めていくには、生徒一人一人の視点に立って、授業形態や展開の工夫をしていく必要がある。しかし、その努力を進めていく余地が少ないという実態もある。こうした現状を克服するためには、「何を教えるかの議論」よりも、「どう教えるか」と「どこまで深く教えるか」を基本に据え、担当者間で共通理解を図るとともに、歴史への興味・関心を高め、社会的事象や歴史的事象の多面的・多角的考察の授業を進め、日本史、世界史という「二本立て歴史教育」在り方を再考し、その連携を考えていく必要がある。こうした、他科目との協同・協力、継続・連携を前提にした授業計画は重要であり、授業公開や校内研修を活性化するなどして、教員全体が共有する必要があると考える。このような問題がある中で、世界史と日本史の接点は極めて限られている。その一例として、「帝国主義と日露戦争」を表2のようにとらえた。表2では①専門高校等で実施する場合の世界史Aと②難易度が高い大学進学希望生徒の多い普通科高校等で実施する世界史A、及び③大学進学希望生徒の多い普通科高校等で実施する世界史Bの3パターンで考察した。なお、便宜上学習活動時間例を単純化した。が、学力や生徒の実態など各状況によって配当時間や順序、空間的認識（同心円か地勢概念）のアプローチを対応するものとする。

時	世界史Bの学習活動時間例③	評価計画				評価観点はBと同じ	
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	Aの活動例①と②	
1	近代国家と帝国主義	ア①[観察]	イ①[発問]		エ①[発問]	①	①
2	オスマン帝国の解体と西アジア	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]	②	①
3	インド・東南アジアの植民地化	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]	②	①
4	東アジアの変容	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]	①	②
5	アフリカの分割	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]	②	②
6	太平洋・カリブの分割	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]	②	③
7	世界分割のまとめ	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①②[発問]	③	④
8	帝国主義戦争～日露戦争～ (本時) [アンケートも含む]	ア①③[観察] ②④	イ①②[発問]	ウ①② [作業]	エ①②[発問]	③	④
9	バルカン問題と第一次世界大戦	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①②[発問]	④	⑤
10	第一次世界大戦	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]	④	⑥
11	大戦後の国際体制	ア①[観察]	イ①②[発問]	ウ①[作業]	エ①②[発問]	⑤	⑦

表2 単元の指導と評価の計画及び世界史Aと世界史Bの相互関係

なお、4校の学校の特色や生徒の実態とそれに基づく授業展開構想は以下のとおりである。

【A校】

生徒は卒業後の目標に向け、学習活動や学校行事、部活動など意欲的に学校生活を送っている。A校における「世界史A」では、世界史に関する知識・理解の幅を広げるために多様な学習方法を提示するとともに、発展的学習内容として近世以前にさかのぼった内容を実施している。A校の地歴・公民科では「世界史B」につながる機会として取り組んでいる。

【B校】

生徒は、授業に対して真剣に取り組み、教師の発問に対しても積極的に反応している。しかし、歴史的事象や社会的事象に対する興味・関心はあまり高くない。そのため、授業で取り扱う内容と現在の国際関係と対比させながら考えさせ、歴史的事象や社会的事象への興味・関心を引き出す工夫を行っている。

【C校】

生徒の学力に幅があることが課題である。そのため「思考・判断」を重視する場面では生徒の思考の意欲をそぐようなあまりにも難度の高い発問は避け、詳しい資料を事前に提示し、生徒が自ら考察する意欲がもてるように工夫している。また多国間の国際関係については、日本を中心として国際関係を考察させる授業展開を行っている。

【D校】

専門高校であり、生徒はグループ作業を通じてものづくりに取り組む学習場面が多い。そのため、作業学習に対しては積極的であり、協調性がある。それらを踏まえ、本授業では作業学習を織り込むことで、協調性と積極性を喚起する教材開発・指導を意図的に行っている。

(2) A校世界史A学習指導案(普通科高校)

ア 単元名 帝国主義時代～日露戦争を転換点としての時代の変化と国際情勢～

イ 単元の目標

- ① 意欲的に授業に取り組むとともに、英国を中心とする帝国主義列強国家の動向について関心を高める。(関心・意欲・態度)
- ② 国際関係の成立の背景・社会変化を考察する。(思考・判断)
- ③ ワークシートとノート学習を併用することで、資料活用能力を高める。(技能・表現)
- ④ 国際関係と国際社会の推移を順序付けて把握する。(知識・理解)

ウ 単元の評価規準および学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
単元の評価規準	意欲的に授業に取り組むとともに、帝国主義列強国家の動向への日本の対応について関心を高める。	インターネット上に存在する資料をもとに国際関係の成立の背景・社会変化を考察する。	ワークシートの活用とノート学習を併用することで、資料活用能力を高める。	国際関係と国際社会の推移を順序付けて把握し多くの知識を身に付ける。
学習活動に即した具体的な評価規準	①授業へ意欲的に参加し、プリントへの記入、ノートの作成が適切に行えたか。 ②学習と既習事項・教科書との関連を理解したか。 ③任意に指名し、的確な解答・対応が出来たか。	①列強の思惑や市民社会の様子を思考できたか。 ②列強諸国の動きから、列強の目的を理解できたか。 ③日露戦争が二国間紛争ではなく、国際政治の局所的現象として理解できたか。	①英国を中心とする勢力範囲図を読み取り、欧米列強の思惑を理解できたか。 ②配布された資料と既習項目を活用しているか。 ③資料(英文及び風刺漫画)ホームページ等の読みとりが出来たか。	①日露戦争に至るまでの国際情勢の基本知識を確認する。 ②日露戦争とポーツマス条約の意味を理解出来たか。 ③日露戦争後の社会的変化を予測し、100年後の今日までの歴史の推移を考察できたか。

※ A校では、発展的な学習を「個に応じた指導」として必要としている。表中網掛けはその内容を示す。

エ 本時の目標

- ① 100年前を振り返り、その後の世界の転換点となった日露戦争の意味をとらえる。
- ② 帝国主義の展開から世界大戦への流れを、日本と世界という複眼的視点で考察する。

オ 授業の展開

エ 本時の目標 (全11時中の第8時)

- ① 日露戦争前後の国際関係を理解することができる。
- ② 日露戦争当時の東京の市民社会の変化について、資料を通して考察することができる。

オ 本時の展開 (全11時中の第8時)

時分	学 習 活 動	評価の観点に基づく具体的な評価規準	評価の場面・方法
導入 10分	①ワークシートを用いて、列強の世界分割と国際関係の内容を復習する。	①既習事項を参考にしながら取り組むことができたか。(関心・意欲・態度)	①生徒の取り組みを観察・評価する。
展 開 35分	①ワークシートの国際関係図に、「露仏同盟」、「三国干渉」を加え、日英同盟が形成された背景を理解する。 ②ワークシートの風刺画に入る台詞を選択肢から選び、日露戦争前の国際関係を考察する。 ③資料プリント(新聞記事等)をもとに、日露戦争前の東京における社会の変化を理解する。 ④日露戦争の戦況について理解する。 ⑤資料プリント(新聞記事等)をもとに、市民社会における日露戦争中の厭戦気分の広がりや戦争継続論について理解する。 ⑥ポーツマス講和条約の内容とその後の列強の動きについて理解する。	①列強の思惑を理解し、日露戦争前の国際関係図を作成できたか。(技能・表現) ②①で学習したことを基に風刺画の背景を考察することができたか。(思考・判断) ③日露戦争が二国間紛争ではないことをとらえることができたか。(思考・判断) ④日露戦争前後の東京の社会の変化を考察することができたか。(思考・判断) ⑤日露戦争の戦況とポーツマス講和条約の内容について理解することができたか。(知識・理解)	①生徒の取り組みを観察・評価する。 ②発問をする。 ③机間指導により、生徒の作業の状況を確認して評価する。 ④ワークシート・ノートを作成させる。
まとめ 5分	①日露戦争の背景を復習し、日露戦争後の国際関係を理解する。	①日露戦争後の国際関係について、理解しようとしているか。(関心・意欲・態度)	①生徒の取り組みを観察・評価する。

エ 評価

- ①日露戦争前後の国際関係を理解することができたか。
- ②日露戦争当時の東京の市民社会の状況について、資料等から考察することができたか。

(4) C校世界史B学習指導案(普通科)

ア 単元名 「帝国主義戦争 ～日露戦争前後の国際関係～」

イ 単元の目標

- ① 意欲的に授業に取り組み、歴史に興味をもつ。(関心・意欲・態度)
- ② 国際関係の背景について考察する。資料を基に社会の変化を判断する。(思考・判断)
- ③ ワークシート、ノートを作成し、自分の意見を表す。(技能・表現)
- ④ 国際関係と国際社会の推移を順序付けて把握し基本的知識を身に付ける。(知識・理解)

ウ 単元の評価規準及び学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
価 規 準 の 評	意欲的に授業に取り組み、歴史に興味をもつ。	国際関係の成立の背景について考察する。資料を基に社会の変化を判断する。	ワークシート、ノートを作成し、自分の意見を表す。	国際関係と国際社会の推移を順序付けて把握し、基本的知識を身に付ける。
具 体 的 な 評 価 規 準	①集中して授業を受けているか。(態度) ②単元で取り上げた話に興味をもてたか。(アンケート) ③他の生徒と協力して取り組めたか。(態度) ④授業を楽しむことができたか。(アンケート)	①列強の思惑や市民社会の様子を考察できたか。(発問) ②植民地における社会の変化を考察できたか。(発問) ③国際法と国際社会の内容を考察できたか。(ワークシート)	①国際関係図を作成できたか。(作業) ②自分の考えをまとめ、意見を表せたか。(発表)	①重要事項を確実に身に付けられたか(考査) ②国際関係と国際社会の推移を順序付けて理解できたか。(発問・考査)

エ 本時の目標（全11時間中の第8時）

- ① 日露戦争前後の国際関係図を理解する。
- ② 当時の東京の情勢について、資料をもとに考察する。

オ 本時の展開（全11時間中の第8時）

時分	学習活動	評価の観点に基づく具体的な評価規準	評価の場面・方法
導入 10分	①列強の中国分割図と義和団事件を復習し、世界の関心が極東に集まってくる経緯を理解する。	①既習事項を確認することができたか。(知識・理解) ②すぐに学習に取り組もうとしているか。(関心・意欲・態度)	①生徒の様子を観察し、評価する。
展開 35分	①ロシアとの同盟を唱える伊藤らの意見と、イギリスとの同盟を唱える山県らの意見を史料で学び、自分の意見を考える。 ②日英同盟締結後の世論を、当時の新聞から読み取っていく。 ③日露戦争の経緯の基本的な事項について理解する。その際、戦争中の国民生活を資料で学び、日露戦争後の展開を考察させる。	①当時の国際関係を復習し、次の展開を考察することができたか。(思考・判断) ②「萬朝報」などの新聞記事の変化から、世論の変化を読み取ることができたか。(思考・判断) ③日露戦争の経緯について理解できたか。(知識・理解) ④戦時中の苦しい国民生活を理解した上でポーツマス条約締結の意義を理解できたか。(知識・理解)	①生徒の様子を観察し、評価する。 ②発問をする。 ③机間指導により、生徒の作業を確認して評価する。 ④ワークシートを作成させる。
まとめ 5分	①ポーツマス条約の概要について学ぶ。 ②日露戦争後の国際関係を理解する。	①日露戦争後の国際関係について、理解しようとしているか。(関心・意欲・態度)	①生徒の様子を観察し、評価する。

エ 評価

- ①日露戦争前後の国際関係を理解することができたか。
- ②当時の東京の情勢について、与えられた資料から考察することができたか。

(5) D校 世界史A学習指導案（専門高校）

ア 単元名 帝国主義時代～日露戦争にいたるまでの時代～

イ 単元の目標

- ① 意欲的に取り組み、国家や工業の歴史と発展に関心をもつ。(関心・意欲・態度)
- ② 帝国主義の背景を考察する。資料から国際社会や国内の変化を判断する。(思考・判断)
- ③ ワークシート・ノートを用いながら、資料を活用している。(技能・表現)
- ④ 国際関係と国際社会の推移を順序付けて把握し基本的知識を身に付ける。(知識・理解)

ウ 単元の評価規準および学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
規 単 準 元 評 単 価 の	意欲的に授業に 取り組み、国家の動向や 歴史に関心を高める。	国際関係の成立の背景を考 察する。資料をもとに国際社会 や国内の変化を判断する。	ワークシート・ノート を用いて資料を活用して いる。	国際関係と国際社会の推 移を順序付けて把握し、基 本的知識を身に付ける。
具 学 体的 習 な 活 評 動 価 動 規 に 準 即 した	①意欲的に参加して いるか。 ②他の生徒と協力し て、作業学習を進め ようとしているか。 ③工業の発展に関心 をもてたか。	①列強の思惑や市民社会の様 子を思考・判断できたか。 ②日露戦争が国際政治の局所 現象であると判断できたか。 ③工業技術の発達は当時の政 治状況と密接に関連するこ とが想起できたか。	①国家の勢力範囲図を色 分けすることで、資料 を活用しているか。 ②資料の図版・写真から 読みとれる特徴等に気 付き、それをワークシ ートに表現できたか。	①日露戦争に至るまでの国 際情勢の基本知識を身に 付けているか。 ②工業技術の発達が歴史に 影響を与えていることを 理解できたか。

エ 本時の目標（全7時間中の第6時）

- ① 日露戦争が極東の局所的な事件ではなく、当時の国際政治の一部としてとらえる。
- ② 工業の発展と国際政治とはかかわりがあることを理解する。

オ 本時の展開（全7時間中の第6時）

時分	学習活動	評価の観点に基づく具体的な評価規準	評価の場面・方法
導入 10分	本時の目標を説明。 1900年前後の工業の発展例を説明する。 (日本初の合弁企業であるN電気の設立 =1899年・本社東京)	①図版を見て、当時の工業製品の特徴等 を考えられたか。(関心・意欲・態度) ②①の考えをワークシートに表現するこ とができたか。(技能・表現)	①発問をする。 ②机間指導を通じてワー クシートを作成への取り 組みを観察・評価する。

展開 1 15分	1900年前後の世界の勢力範囲を視覚的に理解するために、世界の勢力範囲図を色塗りする。(英・仏・露・米・独・日)	①列強の思惑や、日露戦争前の列強の勢力範囲図を理解できたか。(知識・理解) ②国別に分類ができたか。(技能・表現)	①作業状況や統一された色分けの様子を評価する。
展開 2 7分	1905年までの世界の事件を確認する。板書した事件・戦争名を白地図の空欄に記入する。	①日露戦争までの歴史についての理解ができていないか。(知識・理解) ②年表に事件・戦争名が書き込めたか。(技能・表現)	①生徒同士で協力する場面を確認する。 ②板書の年表から事件・戦争名を読み取れたかを評価する。
展開 3 13分	帝国主義列強の動きを説明する。 ①英の縦断政策と仏の横断政策 ②米の南米・太平洋進出 ③ロシアの南下政策(バルカンから極東へ) 日露戦争が導かれる背景を説明する。	①日露の動向の背景には、列強の国際政治力学の思惑があることを判断できたか。(思考・判断) ②日露戦争前の列強の勢力範囲図を理解できたか。(知識・理解)	①板書の説明をワークシートに記入しているかどうかで評価する。
まとめ 5分	工業技術の発達が生徒の国際政治にも大きく関係していることを説明する。 (太平洋横断通信の成功=1901年) 次回の授業への予告	①無線通信の発達が国際政治に与えた影響を思考できたか。(思考・判断) ②工業技術が歴史とかがわりがあることを思考することができたか(思考・判断)	①授業評価の感想を通じて、生徒が関心をもった項目から評価する。

カ 評価

- ① 日露戦争が極東の局所的な事件ではなく、当時の国際政治の一部としてとらえられたか。
- ② 工業の発展と国際政治とはかかわりがあることを理解することができたか。

(6) C校検証授業(実践とまとめ)

【導入】

ワークシートで、既習事項の世界分割を復習させ、国際関係の推移を学ばせながら、日英同盟へとつなげる指導を行った。意欲的に興味をもって取り組んだ生徒が非常に多かった。

【展開】

ワークシートの国際関係図に「露仏同盟」「日英同盟」を加えた上で、ワークシートの風刺画に台詞をつけるという学習を行った。この作業では、多くの生徒が台詞をすぐに入れることができていなかった。生徒がどのような作業に取り組めばよいか(手順など)がよくわかっておらず、戸惑う様子が見られた。それはなぜ風刺画に台詞を入れることが必要なのか、という説明がないままに、いきなり台詞を考えさせる作業に入ったためと思われる。最初のうちは、台詞を入れる作業にも積極性があまり見られなかったため、机間指導をおこない、生徒の意欲・関心を高めるように努めた。

次に、資料プリントを基にして、日英同盟から日露戦争までの、日本の世論・情勢を考える作業を行った。使用した教材は「萬朝報」で、非戦論が開戦論へと流れていく様子を見ていった。生徒にとって中学で既知の学習項目であったためか、生徒からの反応もよかった。発問に対して積極的に答えていた。選択日本史を受講している生徒の中には、日本史のノートを参照し理解を深める姿も見られた。さらに、「萬朝報」から国家の財政状態について触れたときにも生徒の反応がよく、具体的な数値を用いることで生徒の関心をひきつけることができた。

【まとめ】

日露戦争後の国際関係が「三国同盟」と「三国協商」へと流れていくという話を、次回へのつながりとして取り上げ、次回の授業への関心を喚起することができた。アンケート項目では、「授業に興味をもつ話が出てきた」「今日の授業は自分で考える場面があった」「今日の授業ではいつもより作業が多かった」に設定し、生徒の主体的な授業への参加や意欲の度合いについ

での評価を調べた。

生徒による授業評価	4	3	2	1
今日の授業は楽しかった	25.0%	37.5%	32.5%	5.0%
授業に興味をもつ話が出てきた	30.0%	35.0%	30.0%	5.0%
今日の授業は集中できた	57.5%	27.5%	7.5%	7.5%
今日の授業は自分で考える場面があった	42.5%	22.5%	32.5%	2.5%
今日の授業ではいつもより作業が多かった	20.0%	35.0%	37.5%	7.5%

←あてはまる

あてはまらない→

表3 C校における授業評価結果

(7) 分析と考察

【A校】

A校では生徒の進路希望の大半が大学進学であるので、いかに生徒の学力を高め、生徒の自己実現を図り希望する大学等への進学を実現させるように指導していくかが学校の課題である。A校では「世界史A」を設置していることから、理数系選択者は体系的な歴史学習をすることなく、高校の段階で終了する可能性がある。そのため、単に知識・理解を中心とした授業展開よりも歴史を学ぶ意味を考え、その大切さと楽しさを提示していく必要がある。また、「世界史A」では、近現代史を中心に学習することになっているが、特に「文明論」や「人類の相互的な発展」を理解し、歴史全体をとらえる意味でも「通史」を補足的に指導する必要があるだろう。そこで本校では、「楽しみ」ながらも「世界の歴史」を学び、将来にわたって継続的な自己学習につながる、いわゆる生涯学習のための基礎作りとしての学び方を身に付けさせるため、多様な学習方法や資料収集の方法を提示する指導を行ってきた。今年度の研究主題である「主体的に考える力を培うための個に応じた指導の一層の充実～学校の特色を踏まえた指導の工夫～」を意識した授業を行うことで、興味・関心を引き出し、進学のための世界史だけではなく、幅広い歴史学習を通して歴史的なものの見方・考え方を習得することを目指す必要があると考えた。

【B校】

B校では、1900年前後の列強がどのような思惑をもって行動していたのか、また既習事項が整理されているかどうか、発問を通して個々の生徒に確認することが大切である。その上で、列強同士の同盟関係を把握し、その動きが東アジア地域に向かっていることを確認させた。これにより、複雑な列強の意図を整理することができ、日露戦争の背景についても、2国間紛争ではないことを理解させた。また、日露戦争については、開戦前の状況について、国際関係を表した風刺画を取り上げ、登場人物（日・露・英・米）の思惑（台詞）を考察させた。ここでは、選択肢以外の見方・考え方の発問を通して導き出し、開戦の背景について生徒個々の興味・関心を引き出すことができた。さらに、「萬朝報」等の資料を提示し、当時の市民社会の考え方の変化や、自分ならどのように感じるかを考えさせることにより、日露戦争に対する世論の変化を考察させることができた。

【C校】

C校では、導入部において、英・米・日・露の動きを復習し、既習事項の確認をすること重視した。風刺画に台詞を入れる指導においては、生徒により台詞を考える時間に格差が生じるため、台詞を選択肢にする方法もあってよい。日露戦争の戦況については、発問を通して生徒の反応を引き出すことができた場面であり、新聞史料や外国メディアの史料も交えてより深く考察することができた。戦時中の国民生活や世論については、国の財政状態を資料として取り上げた。まとめの部分では、再度国際関係を整理することにより、世界史Bで大学受験を意識している生徒に対し、帝国主義時代における知識・理解を深めることができた。この点においては、大学受験者に応じた授業展開になったと考えている。

【D校】

専門教科での学習を踏まえ、具体的な事例（工業製品など）を活用することで歴史学習を身近に感じる意識付ける工夫を行った。そのために導入で、「扇風機＝電気うちわ」を輸入販売したN電気と無線通信機を発展させたイタリアの科学者G・マルコーニを用いた。ここでは東京に本社のあるN電気が電気うちわを輸入し、販売するという経緯から東京発の世界史への導入となり、「無線通信機」の発展が帝国主義的な広範囲な国家・軍事活動にかかわりを持った「1905年」という時代状況と合致すると考えた。また、展開1の作業学習はまずは作業を完成させることを目標として達成感を味わわせ、同時に複雑な国際政治のダイナミズムの説明も地図学習を踏まえることで、より具体的なイメージの喚起をうながした。考察としては、展開1で生徒による作業「進度」に差が大きい場合は、一定の時間を区切って作業学習をするように事前に生徒に指示すること。そして進度の早い生徒に対して他の生徒への支援を促すとともに、遅れがちな生徒に対して、次の学習項目に気持ちを切り替えさせることの重要性を認識させられた。

評価項目	5	4	3	2	1
今日の授業内容は難しかったか（5：やさしい、1：難しい）	11.1%	0.0%	44.4%	22.2%	22.2%
当時の国際政治の説明や話し方は分かりやすかったか （5：分かりやすい、1：分かりにくい）	11.1%	33.3%	44.4%	11.1%	0.0%
作業学習に集中できたか（5：できた、1：できなかった）	11.1%	33.3%	22.2%	11.1%	22.2%
工業の発展と歴史には、かかわりが深いことを理解できたか （5：理解できた、1：理解できなかった）	22.2%	22.2%	22.2%	11.1%	22.2%
今日の授業は将来役立つか（5：役立つ、1：役立たない）	22.2%	11.1%	33.3%	11.1%	22.2%

表4 D校における授業評価結果

【4校のまとめ】

4校の検証授業及び指導案を通して、一斉講義型になりがちな世界史の授業において、ワークシートやノート（板書の工夫や発問の工夫）など多様な生徒へのアプローチをもって進めることで、「個に応じた指導」の形が見通せた。また、生徒も授業への参加意欲が向上した。さらに、ワークシートやノートを授業の流れの中で工夫して活用することで、生徒に考えさせる時間を確保することができ、主体的に授業に取り組む姿勢がついて行くことがわかった。

なお、これは、1単位時間の試みではなく、継続して実践することが重要であると考えられる。

2 日本史A「1世紀前・東京から考える日本近代史」

(1) 内容設定の理由

国際化の第一歩として、自国の歴史や文化に対する興味を抱き、知識を得て、考察することは必要なことである。ここにおいて、高等学校における日本史学習の役割は大きく、そうした認識をもって授業を展開していく必要がある。

本分科会で検証する授業においては、地理歴史・公民部会のキーワードである「1905年」「東京」を意識しつつ、「日露戦争」や「日比谷焼き討ち事件」の理解だけにこだわらない日本近代史の事象を広く取り扱うことにより、自ら考える力を培い、自分なりの歴史像を構築させることを目標とする。また、本報告書の「主題設定の理由」にある、科目相互の連携を図り、かつ「個に応じた指導」及び「学校の特色や生徒の実態を踏まえた指導」を念頭に置いた授業を追究した。したがって、表題をあえて抽象的表現で設定し、本分科会各研究員が所属する3校の学習指導案を作成することとした。3校の学校の特色や生徒の実態(①)とそれに基づく授業展開構想(②)は以下のとおりである。

【E校】

- ① 生徒は授業の中で主体的に歴史事項の詳細な内容に関心をもち、知識・理解を深めることができる。加えて「なぜ」「どうして」を自ら追究し、考えられる生徒が多い。
- ② 各時代を概観し、理解と認識を深める工夫が必要である。「1905年」「東京」を意識した明治時代の外交政策を導入とし、大正時代の外交政策を概観する授業を展開する。

【F校】

- ① 「朝は資格(資格取得のための「早朝講習会」)、放課後は部活、学習は真剣勝負」を合言葉に、目的意識をもって学習活動に臨んでいる。平素から、基礎的・基本的な学習の定着を図り、授業に対する興味・関心をもたせるように工夫している。
- ② 地図、風刺漫画を用いた授業が生徒の興味・関心を引き、「板書」「説明」中心では培いにくい「自ら考える力」を身に付け、自分なりの歴史像を作り上げていく段階的な指導について検証する。

【G校】

- ① 生徒の学習への興味・関心、意欲を高めるための指導について学校全体で取り組んでいる。その成果として、平素の授業態度や提出物等の大切さを理解し、授業に対して積極的に取り組む生徒が多くなっている。
- ② 「100年前の東京」を地理歴史科目の各観点から多角的にとらえさせることを日清・日露戦争前後の通史学習の導入とする。古地図や視聴覚教材の有効活用、作業的学習の手法を用いて、生徒の学習意欲を高めていく。

学習指導要領にある「2 内容」に基づいて、E校は「(3)近代日本の歩みと国際関係」、F・G校は「(2)近代日本の形成と19世紀の世界」について指導する。また3校とも共通して「東京」を題材とした授業を展開することから「2 内容(1)歴史と生活」的な要素を内容(2)(3)の学習と関連させて取り扱うこととする。学習指導案作成にあたっては、「学校の課題や特性をとらえる」だけでなく体験的・作業的な学習を重視し、机間指導や発問を通して「生徒一人一人に応じた授業展開」を行うことに留意し、多面的・多角的に考察し公正に判断する能

力を育成していく。なお、F・G校については共通項を見出して簡略化した指導案で報告する。

(2) E校日本史A学習指導案(普通科)

ア 単元名 第4章 第一次世界大戦と日本 第2節 第一次世界大戦とワシントン体制

イ 単元の目標

- ① 第一次世界大戦前後の日本の状況への関心を高め、意欲的に追究する姿勢をもたせる。
(関心・意欲・態度)
- ② 第一次世界大戦と戦後の国際情勢に、日本がどのように対応したかを考えさせる。
(思考・判断)
- ③ プリント等を通じて、授業内容をまとめさせる。(技能・表現)
- ④ 大正時代の外交政策の推移を、諸外国との関係と関連付けて理解する。(知識・理解)

ウ 単元の評価規準及び学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
単元の評価規準	第一次世界大戦前後の日本の状況への関心を高め、意欲的に追究する姿勢をもたせる。	第一次世界大戦と戦後の国際情勢に、日本がどのように対応したかを考えさせる。	プリントなどを通じて、授業内容をまとめさせる。	大正時代の外交政策の推移を、諸外国との関係と関連付けて理解・整理させる。
学習活動に即した具体的な評価基準	①授業に意欲的に参加しているか。 (態度) ②単元で取り上げた事項に関心をもちたか。(アンケート)	①第一次世界大戦前後の外交政策と、明治時代、特に1905年以前の外交政策との違いを考察できたか。(発問) ②第一次世界大戦中の外交政策と国際情勢との関連を考察できたか。(発問) ③第一次世界大戦後の外交政策と国際情勢との関連を考察できたか。(発問)	①プリントや論述問題などで、大正時代の外交政策をまとめられたか。(作業)	①重要事項を確実に身に付けられたか。(考査) ②大正時代の外交政策を、諸外国との関係と関連付けて理解できたか。(発問・考察)

エ 単元の指導と評価の計画

時	学習活動	評価計画			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	大正時代の外交政策の概観	ア① [観察] ② [アンケート]	イ① [発問]		エ② [発問]
2	第一次世界大戦と日本の中国政策	ア① [観察]	イ② [発問]		エ② [発問]
3	ヴェルサイユ体制、ワシントン体制と協調外交	ア① [観察]	イ③ [発問]	ウ① [作業]	エ② [発問]

オ 本時の目標(全3時間中の第1時)

- ① 明治時代、特に1905年以前の外交政策の特徴を理解する。
- ② 大正時代の外交政策の概観を1905年以前の外交政策と比較し、理解させる。

カ 本時の展開(全3時間中の第1時)

時分	学習項目・内容 生徒の学習活動	個に応じた指導の工夫や観点 教員の働きかけ	評価規準 評価方法
導入 15分	プリント中の外交上の事件(日清戦争・中国分割・日露戦争)及び明治時代の東京市民に関する風刺漫画を用いて明治時代(特に1905年まで)の外交政策を復習する。	①明治時代の外交目標とその目標が達成されたことを確認し、どのような形でその目標が達成されたかを風刺漫画を通じて考察させる。 ②生徒への発問を通じ、外国の風刺漫画に描かれた外交上の特徴を考察させ、答えさせる。 ③①・②から明治時代の外交政策の特徴をまとめさせる ④生徒への発問を通じ、明治初期と末期の東京市民の違いを答えさせ、明治末期における日本の外交上の位置について考察させる。	明治時代の外交政策を理解しているか、その結果、大正時代の外交政策の展開に興味をもったか生徒の様子を観察し、評価する。(思考・判断、関心・意欲・態度)

展開 25分	大正時代の各内閣の外交政策と欧米列強の反応をプリントに記入させる。	①第一次世界大戦と戦後の国際情勢に関し、日本の外交政策と欧米列強の反応をプリントにまとめさせる。その際、明治時代の外交政策との違いを考察させる。 ②各内閣（大隈・寺内・原・高橋）の外交政策の特徴をプリントにまとめさせる。	大正時代の外交政策の概観を、プリントにまとめられたか。明治維持代の外交政策との違い、第一次世界大戦と戦後の外交政策の違いを考察できたか。（思考・判断）
10分 まとめ	プリントで、大正時代の外交政策の概観を確認する。 生徒による授業評価を記入する。	生徒への発問を通じ、展開の①・②から、各内閣（大隈・寺内・原・高橋）の外交政策の傾向を考察させる。その際、明治時代の外交政策との関連も考察させる。	大正時代の外交政策の概観を理解することができたか。（知識・理解） 次回以降の外交政策の展開に興味を持ったか。（関心・意欲・態度）

キ 評価

- ① 明治時代、特に1905年以前の外交政策の特徴を理解することができたか。
- ② 大正時代と1905年以前の外交政策を比較し、その特徴を理解することができたか。

(3) F校日本史A学習指導案（専門高校）

ア 単元名 2内容（2）ウ 国際関係の推移と近代産業の成立

イ 単元の目標

- ① 国際関係の推移と近代産業の成立に対する関心を高めさせ、課題意識をもたせるとともに意欲的に追究させる。（関心・意欲・態度）
- ② 我が国の対外政策の推移と近代産業の成立を、条約改正や日清・日露戦争前後の欧米諸国やアジア近隣諸国との関係の変化と関連付けて多面的・多角的に考察させるとともに、公正に判断させる。（思考・判断）
- ③ 国際関係の推移と近代産業の成立に関する諸資料を有用に活用しながらまとめる技能・表現力を高めさせる。（技能・表現）
- ④ 国際関係の推移と近代産業の成立についての基本的な事柄を国際情勢と関連付けて理解させ、その知識を身に付けさせる。（知識・理解）

ウ 単元の評価規準及び学習活動に即した具体的な評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
評価規準の	国際関係の推移と近代産業の成立について興味・関心を高める。	国際関係の推移と近代産業の成立について、多面的・多角的に考察し、判断する。	教科書の活用やプリント作業、ノート作りを通じ、自分なりにまとめられる。	国際関係の推移と近代産業の成立についての基本的な知識を身に付ける。
学習活動に即した具体的な評価規準	①授業に意欲的に参加しているか。（態度） ②単元で取り上げた事項に関心をもてたか。（アンケート）	①教科書を読み、また教師の説明を聞き、その内容について考察できたか。（発問）（作業）	①教科書等を参照してプリント教材の作業を行い、またノート作りに取り組めたか。（作業）	①歴史的事実を基本的な知識として身につけることができたか。（発問）

エ 単元の指導と評価の計画

時	学習活動	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	100年前の東京から考える日本近代史	ア①[観察] ②[アンケート]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]
2	条約改正	ア①[観察]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]
3	朝鮮問題と日清戦争	ア①[観察]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]
4	中国分割と日英同盟	ア①[観察]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]
5	日露戦争と国民生活	ア①[観察] ②[アンケート]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]
6	台湾と韓国併合	ア①[観察]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]

7	植民地経営	ア①[観察]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]
8	産業革命	ア①[観察] ②[アンケート]	イ①[発問]	ウ①[作業]	エ①[発問]

オ 本時の目標（全8時間中の第5時）

- ① 日清戦争から日露戦争に至るまでの我が国と欧米諸国や、アジア近隣諸国との関係がどのように変化してきたかを多面的・多角的に考察、復習する。
- ② 技術・表現力を高めるために各種資料の活用やプリント作業を課すだけでなく、資料から「自ら考える」力を養っていく。

カ 本時の展開（全8時間中の第5時）

時分	学習項目・内容 生徒の学習活動	個に応じた指導の工夫や観点 教員の働きかけ	評価規準 評価方法
導入 15分	風刺漫画「“巨人”キラーの日本」などを見て、日清戦争から日英同盟までの流れ、我が国と近隣諸国との関係の変化を、自ら考えつつ復習する。	①風刺漫画の内容を示す文の空欄に語句を選択することで、文を完成させる。前時、地図で作業した「列強の中国分割」を思い出させる。 ②考えさせる間、机間指導を行う。	教科書を用意し授業に臨んでいるか等、生徒の様子を観察して評価する。 (関心・意欲・態度) ワークシートへの取り組み方を観察し評価する。(関心・意欲・態度、技能・表現)
展開 35分	風刺漫画「爪をかけるな」「朝鮮をめぐる日露」を見て、日露戦争の原因について考える。 風刺漫画「旅順のロシア軍」を見て日露戦争の戦況について考える。 日露戦争に関連する東京の状況を資料から読み取る。	①それぞれの風刺漫画の内容を表した文の空欄に語句を選択記入することで、文を完成させる。 ②発問し、答えとしてふさわしいかどうか確認するが、正解、不正解でなく、考える過程が大切であることを強調する。	ワークシートへの取り組み方を観察し評価する。 (関心・意欲・態度、技能・表現) 発問し、理解できたか確認する。(知識・理解)
まとめ 5分	日露戦争後、我が国と近隣諸国・欧米諸国との関係がどう変わっていくのかを予想させる。 生徒が授業評価を記入する。	①「朝鮮をめぐる日露」などを参考に考えさせる。 ②数字の評価だけでなく、自由意見も書いてくれるよう促す。	提出後のワークシートを点検し、日露戦争後の国際関係を考察しようとしているか判断する。(思考・判断)

キ 評価

- ① 日清から日露戦争に至るまでの我が国と他国との関係を理解することができたか。
- ② 各種資料やプリントから、この時代の状況を想像し、理解することができたか。

(4) G校日本史A学習指導案（普通科）

(ア 単元名 から エ 単元の指導と評価の計画 まで前記(3)F校に同じ。)

オ 本時の目標（全8時間中の第1時）

- ① 100年前の東京・日本についての興味・関心を高めさせ、当時の人々の生活について多面的・多角的に考察させる。
- ② 技術・表現力を高めるために各種資料の活用やプリント作業を課し、東京を日本的側面だけでなく、地理的変容や世界史的意義について理解させる。

カ 本時の展開（全8時間中の第1時）

時分	学習項目・内容 生徒の学習活動	個に応じた指導の工夫や観点 教員の働きかけ	評価規準 評価方法
導入 15分	G校付近を中心とした古地図を見て、100年前の東京をイメージする。	①机間指導を行い、マーク箇所を一緒に探す。 ②地図記号について簡単に説明した上でG校付近の様子を簡単に説明する。	教科書を用意している等、授業に臨む体勢を取れているか、生徒の様子を観察して評価する。 (関心・意欲・態度)

展開 35分	教科書を参照して、教師自作のプリント教材の作業学習を行う。教師の説明を聞く。 ・日露戦争（日本海海戦VTR視聴、約3分）にかかわる増税や足尾鉍毒事件から考察する100年前の人々の生活について ・夏目漱石『我輩は猫である』発表 ・孫文、中国同盟会結成	①生徒を指名して教科書の参照箇所を音読させるなど学習を進めるための基本的な指導を行う。 ②机間指導を行い、生徒個々の作業を支援する。 ③世界史的項目の説明は簡略化に努めるが、辛亥革命における東京の意義について考察させる。	VTRを真剣に視聴しているか、プリントの作業を真剣にやっているか、生徒の様子を観察して評価する。（関心・意欲・態度・技能・表現） 発問し、理解できたか確認する。（知識・理解）
5分 まとめ	本時の授業についての感想を書く。 生徒による授業評価を記入する。	①通史学習との関連について、確認の説明を行う。	現在と100年前の違いを考察できたか。 （思考・判断）

キ 評価

- ① 100年前の東京に住んでいた人々の生活について、考察することができたか。
- ② 資料等から東京の変化を考察することができたか。

(5) 検証授業（E校の実践とまとめ）

【導入】

プリントで、既習事項の明治時代の外交政策を復習した。明治時代の外交目標がどのような形で達成されたかを考察させるため、風刺漫画を用いた。風刺漫画の意味について生徒に発問し、自由に意見を出させることで、単に事件名だけでなく、日本と欧米列強・アジア諸国との関係など、様々な外交関係の見方・特色をクラスで共有させることができた。また、明治時代の外交政策の理解も進んだと思われる。アンケートから、生徒の主眼的に考える姿勢はうかがえたが、積極的に意見が出る雰囲気作りが必要と思われた。

【展開】

大正時代の外交に関するプリント教材を課した。第一次世界大戦と戦後の国際情勢の変化に日本がどのように対応したか、また、日本の外交政策に対する欧米列強の反応について、プリントに記入させた。さらに、各内閣の外交政策の特徴を考察させ、プリントにまとめさせた。ここでは、詳細な事象羅列を避け、あくまでも大正の外交の流れを概観させ、明治時代の外交政策との違いを考察させることを前提とした。生徒は、明治時代の外交政策との違いには考える姿勢は示したが、発問・作業など授業者からのより一層の働きかけが必要と思われた。

【まとめ】

大正時代の外交政策のまとめとして、概観を確認した後に、各内閣の傾向と、明治時代の外交政策との関連も考察させた。

(6) 各校の分析と考察

【E校】

今回の授業では、発問を多く取り入れ、風刺漫画を活用して、様々な見方に気付き、自ら考えることを重視した。アンケートの自由意見に「風刺漫画を通じて時代の背景がつかめて良かった」「自分で考える時間があると、より考えが深まるので、書くことも大事だけれど、考えることも大事だと思った」とあるように、ある程度の成果はあった。しかし、授業の興味・関心を高め、理解を進める点については、アンケートより不十分であったと言える。本校の場合は、通常の授業から、歴史事項の説明を中心とするのではなく、自ら考えることが、改善の方策であると考えられる。

生徒による授業評価	4	3	2	1
今日の授業内容に興味をもつことが出来た。	39.0%	47.6%	10.5%	2.9%
今日の授業は自分で考える場面があった。	51.4%	37.1%	7.6%	3.8%
自分なりに理解が進んだ。	34.3%	45.7%	17.1%	2.9%
次回以降の授業に役立つ内容だった。	41.9%	42.9%	12.4%	2.9%

←あてはまる

あてはまらない→

表5：E校授業評価アンケート結果

【F校】

「いつものプリントよりは多く考えたから疲れるけど、良いと思う。」という生徒の自由意見から、歴史の流れを順に追っていく講義ではできない「生徒が自ら考える」授業を展開できたといえる。ただ、日露戦争にいたるまでの国際関係を「多面的・多角的」に考えさせられたか、という点では不十分な面があるため、①前時までの日清・中国分割の学習に工夫をこらし、多様な見方・意見が出せるよう、基礎・基本を育成しておく、②見やすいワークシートに改善する等の方策で生徒に考える時間をより多く確保する、といった改善の余地がある。

【G校】

G校付近の古地図を「導入」で扱うことにより、生徒の興味・関心をひきつけることができた。また作業的学習を通じ、生徒の主体的な活動を促すことができた。しかし、おおまな時代と地域をイメージさせる、またはそのための知識の定着させる、という2点においては、さらなる工夫の必要を感じた。ただし、生徒の既存知識量や作業学習の様子等から、2時間展開で行えば、改善できる見込みのある課題である。

生徒による授業評価 評価項目	F校				G校			
	4	3	2	1	4	3	2	1
興味をもって取り組めた50分間だった	23.5%	57.4%	17.4%	1.7%	35.4%	56.9%	6.2%	1.5%
プリント作業にしっかり取り組めた	48.7%	40.0%	9.6%	1.7%	56.9%	33.8%	7.7%	0%
自分なりに知識が増えたり理解が進んだ	32.2%	44.3%	20.9%	2.6%	26.2%	55.4%	15.4%	3.1%
F校：いつもより自分で考えられた G校：100年前の東京がイメージできた	32.2%	44.3%	19.1%	4.3%	32.3%	52.3%	12.3%	3.1%

表6：F・G校授業評価アンケート結果

【3校について】

3校の検証授業を通して、主体的に考える力を培い、歴史像を構築させることが、歴史学習においては重要であるという認識を得た。歴史的な見方・考え方を重視した授業を行うことが、E校では大学入試に対応できる知識量の蓄積を助け、F・G校では、生徒が「日本史が楽しい」「授業を前向きに受けよう」などと日本史に対する興味・関心を高める結果になった。

ただし、「学校の特色を踏まえた指導の工夫」は達成できたと思うが、「生徒一人一人に応じた授業」という目標達成にまでは至らなかった。しかし、この課題は授業時間のみならず、休み時間や放課後を有効活用して、指導時間を確保し、生徒との人間関係を築くことに努めていく必要を各研究員が共有した。

3 地 理 1905年～東京

古地図と現在の地形図との比較からわかる地域の変容（東京城東地区）

(1) 内容設定の理由

共通テーマである「1905年 東京」を高等学校地理で取り上げる場合、「身近な地域」学習の一環として、とらえることが可能である。都立高校の生徒にとって東京は「身近な地域」であり、その中にある地理的諸事象を学習することは、現実にも身近な地域で起こった様々な現象や人間の活動などと一般化された地理の学習内容を結びつけることができる意味で、教育上きわめて有効であると考えられる。地域調査(学習)の準備として様々な資料や文献、あるいはインターネットなどの活用が考えられるが、今回は新旧地形図の読図による地理的諸事象の分析を導入した学習内容とした。新旧地形図の比較を行うことによって様々な情報(地理的諸事象や地域の変容など)を読み取る力は、地理教育の目標の一つである地理的な見方・考え方を養う上で有効であり、学習内容とする意義は大きい。学習指導要領における内容の取り扱いの中にも「(1)イ地理的な見方や考え方及び地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど地理的技術を身に付けることが出来るよう系統性に留意して計画的に指導すること。」とされている。

今回立案した学習計画の中で使用する地図は、19世紀後半に測量・作成された2万分の1フランス式彩色地図や大正期に作成された地形図、それに最新の国土地理院2万5千分の1地形図である。これらを身近な地域の教材として用意し、読図や書き込み等の作業を通じて19世紀の終わり頃から20世紀初頭にかけての東京と現代の東京を比較・分析させることによって、東京の地域的変容の特徴を理解させることを指導計画の中の学習目標とした。地域の変容を学習内容として取り上げる場合、歴史的な内容も適宜導入していく必要があり、時代をさかのぼった資料(教材)を用意する必要がある。そこで、かつての地域の諸状況を伝える歴史的な内容を含んだ資料等を作成し、それを通じた学習を行うことによって、より深く地域変容の実態を理解させることを目指した。指導計画では、地図の読み取りや書き込みを学習活動の大きな要素とする一方で、荒川放水路(現荒川)の開削をはじめとするこの地域における様々な地理的事象を取り上げることにより、東京城東地区の地域的特徴を捉えさせることを目指した。身近な地域である東京で、現実にも起きてきた地域変容の一面を知る貴重な機会となる学習内容であり、そのような観点からもこの内容を取り上げる意義は十分に認められる。

(2) 地理における個に応じた指導

地理の学習指導の中で、個に応じた指導を行う手法には以下の4点が考えられる。

- ①地形図の読図や様々な統計を処理(主題図や各種図表を作成させるなど)する指導を通じて「個に応じた指導」を行う。
 - ②問題演習などを通じて、個に応じた指導を行う。
 - ③授業を通じて作成させたノートや宿題・課題を提出させ、提出→添削→個人指導のような流れで、個に応じた指導を行う。
 - ④授業の主題によっては、生徒に課題やテーマを提示し、それらについての調査・分析をさせた上でその成果を提出・発表させる形態の学習が考えられるが、この指導の過程で、様々な相談に応じたりアドバイスを加えたりしながら個に応じた指導を行う。
- 一斉授業の中で作業や問題等に取り組ませているときの机間指導などは、生徒と指導者とが

エ 単元の指導と評価の計画

時	学 習 活 動	評 価 計 画			
		関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	木場の材木産業	ア① [観察]	イ① [発問]	ウ① [作業]	エ① [発問]
2	荒川と治水対策	ア① [観察]	イ① [発問]	ウ① [作業]	エ① [発問]
3	隅田川の橋と渡船の歴史	ア① [観察]	イ① [発問]	ウ① [作業]	エ① [発問]
4	佃島や月島の埋め立て	ア① [観察]	イ① [発問]	ウ① [作業]	エ① [発問]
5	石川島播磨重工の成立と移転	ア① [観察]	イ① [発問]	ウ① [作業]	エ① [発問]

オ 学校の特色と生徒の実態

H校は、在籍する生徒の80%以上が学校の近隣区に居住している。そのため、地理の授業においてこれらの地域を取り上げることで、生徒は興味をもって学習に臨むことができると考えられる。また、H校の生徒は、作業学習に対して積極的に取り組む傾向があるので、地理の授業においても作業学習の有効的な活用が可能であると考えられる。

カ 本時の目標（全5時間中の第2時）

- ① 古地図と現在の地形図を比較し、さまざまな地理的事象の変容を読み取ったり、書き込んだりすることができる。
- ② 東京下町地域の地理的特徴を踏まえた上で、荒川放水路の開削がこの地域の水害防止につながったことを理解する。

キ 本時の展開（全5時間中の第2時）

時分	学習項目・内容 生徒の学習活動	個に応じた指導の工夫や観点 教員の働きかけ	評価規準 評価方法
導入 10分	①1882年・2001年の二枚の地図を比較し、身近な地域がどのような変容をしたかを読み取る。4～5人のグループをつくり、新旧の地図を比較し、どのような変化がみられるかを考え、発表する。	机間指導を通じて生徒一人一人の能力や個性に対応したきめの細かい指導を行う。 グループ内で活発な話し合いが行われる雰囲気を作る。	生徒の様子を観察し、評価する。 発表内容をみる。
展開 30分	②荒川放水路の存在について触れ、なぜ、このような大規模な工事が行われたのか、考えて発表する。同じくグループをつくり、考えて発表する。	河川改修の費用等を示し、ばく大なコストがかかることに触れる。 荒川周辺の地理的事象に気付かせ、地理的見方・考え方を養う。	発問をする。 発表内容をみる。
	③東京における水害(明治43年の水害)を伝える写真等を入れたプリントを見て、水害の歴史について理解する。さらに、水害の原因と、どのような対策がなされてきたかを知る。	荒川の瀬替え、水害の歴史等を説明する。細かな事象には立ち入らないようにする。写真等、視覚に訴える教材を用意する。	生徒の様子を観察し、評価する。
まとめ 10分	④1920年頃の地図をみて、荒川・隅田川を着色する。また、荒川放水路との比較を通じ、どのような特徴があるかを理解させる。個別に色塗りを行い、グループで考えて発表する。	机間指導を通じて生徒の状況に応じたきめの細かい指導を行う。 色塗りの作業そのものには時間をかけないようにする。	机間指導を行い、作業状況を評価する。
まとめ 10分	⑤板書によるまとめを行う。 本時の学習内容を整理する。	本時の学習を通じて得られた成果をまとめさせる。	

ク 評価

- ① 古地図と現在の地形図を比較し、地理的事象の変容を読み取ることができたか。
- ② 荒川放水路の開削がこの地域の水害防止につながったことを理解することができたか。

(4) 検証授業

【導入】

1882年と2001年の地形図を比較させ、グループごとに変容を読み取らせた。全6班のうち3班が荒川放水路の誕生をあげたが、残りの3班は鉄道の敷設、市街化地域の増加、田畑の消失をあげた。もちろんこれらの解答は誤りではないが、軽く触れるにとどまり、荒川放水路の建設に着目させ、展開へと移っていった。

なお、グループ学習は、授業者が近隣の生徒を中心にメンバーを指定して行った。



図1 授業で使った地図の一部分（縮小して掲載）

上図：明治前期測量二万分の一フランス式色彩地図「東京府武蔵国本所区深川区及び南葛飾郡亀戸村近傍村落」（財）日本地図センター発行

下図：2001年（平成13年）の二万五千分の一の地図「東京首都 二万五千分の一」 国土地理院発行

【展開】

②では、やはり班ごとに解答が分かれ、水害対策と答えたのは半分であった。他、水運や灌漑用などの解答であった。

③においては、板書やプリントによる説明を行った。とりわけ、当時の河川の氾濫による被

害の様子を伝える写真が生徒の関心をひいたようであった。

④では、地形図の色塗り作業を行った。旧荒川と放水路の異なる点の考察は川幅・蛇行の度合いなどの解答にまとまった。

(5) 分析と考察

① 集計 (Q1)

授業後のアンケートを通じて、多くの生徒が授業について肯定的な回答をしている。しかし、その中で③『将来、ためになる内容だと思った』や⑤『自分の能力や技術に応じた学習活動ができた』では、3割～4割程度の『そうは思わない』と回答した生徒があった。

一方で①『授業の内容に興味をもつことができた』や②『知識が増えたり理解が進んだりした』、④『適切なアドバイスや指導を受けることができた』では8割以上の生徒が『そう思う』と回答した。

(Q2 自由意見)

「以前は頻繁に大水害が起きていたとは知らなかった。いい勉強になった」「地元についてもっと知りたいと思った」「昔の人の努力がわかった」などがあつた。

②考察

ワークシートの集計から、多くの生徒が身近な地域についての興味をもっており、荒川の水害の歴史や放水路の建設について理解を深めることができたようである。

また、地形図の比較や色塗りを行い、地域の変容について考察をしたことから、本時の目標であつた地域変容の状況や荒川放水路開削

の意味を理解させることは達成できたと考える。ただし、⑤の結果を見ると、自らの能力や技術に対応している内容でないという生徒が多少見られる。生徒の多様な実態に対応可能な教材を開発し、授業を展開することが今後の課題である。しかし、アンケート分析の結果、身近な地域を教材として取り上げたことや作業学習時の机間指導をきめ細かく実践したことにより、多くの生徒達は身近な地域に興味をもち、主体的に作業学習に臨むことができた。そのような学習の中で授業者側から積極的に働きかけを行うことにより、「個(あるいは学校の特色)に応じた指導」がある程度実践できたものと考えられる。

() 年 () 組 () 番 氏名 _____

Q1 下の①～⑤の各項目について次の A～D のどれにあてはまるか、かつこの中に○印を記入して下さい。

A そう思う
B ややそう思う
C あまりそうは思わない
D まったくそうは思わない

評 価 項 目	評 価
①授業の内容に興味をもつことができた。	A () B () C () D ()
②知識が増えたり理解が進んだりした。	A () B () C () D ()
③将来、ためになる内容だと思った。	A () B () C () D ()
④適切なアドバイスや指導などを受けることができた。	A () B () C () D ()
⑤自分の能力や技術に応じた学習活動ができた。	A () B () C () D ()

Q2 この授業(身近な地域の古地図と現在の地図との比較)を通じて感じたこと、わかったことを下の欄に書いて下さい(どんなことでもかまいません)。

図2：授業評価アンケートシート

ワークシートの集計結果 (Q1)	A	B	C	D
①授業の内容に興味をもつことができた。	12%	76%	8%	4%
②知識が増えたり理解が進んだりした。	40%	48%	12%	0%
③将来、ためになる内容だと思った。	12%	60%	24%	4%
④適切なアドバイスや指導などを受けることができた。	20%	68%	8%	4%
⑤自分の能力や技術に応じた学習活動ができた。	4%	56%	32%	8%

表7：授業評価アンケート結果

Ⅲ 成果と課題

1 研究の成果

- (1) 本部会では、「主体的に考える力を培うための個に応じた指導」について、「授業改善推進プラン」等、各種資料を月例会で学んできた。ここでは、先行的研究の成果である社会的事象や歴史的事象の多面的・多角的考察や、教材・資料の作成及び提示方法あるいはワークシートの工夫だけに依拠するのではなく、生徒の「個に応じた指導」を「学校及び生徒の実態に応じた授業展開」する工夫とその共有・継承の重要性について、研究員の中で共通理解が深まった。
- (2) 世界史では①専門高校の世界史A②進学校で実施する世界史A③進学を意識した世界史B、日本史では①進学指導重点校②専門高校③特色ある普通科という形式、そして地理では「東京城東地区」を教材として取り上げた形式での「学校の特色に応じた」指導案を作成した。その結果、生徒による授業評価において授業に対する「興味」を聞いたところ、いずれの学校においても4段階評価の「4」「3」の肯定的な評価が8割を超えた。
- (3) 共通キーワード「東京」「1905年」を設定したことにより、科目相互の連携に関して一定の成果があがった。①地理・日本史の学習指導案の中で、同じ地図を導入として用いた場合どのような切り口で生徒の興味・関心を喚起させられるか。②同じ資料（風刺漫画）を世界史・日本史が授業で使用する場合、globalからnationalという視点（世界史）とnationalからglobalという視点（日本史）という違いが現れる等の点である。世界史の検証授業において、日本史のノートを取り出し、講義を聞く姿がみられたことから、科目横断的な考え方は「個に応じた指導」に有効であることが実証できたと考える。
- (4) 「個に応じた指導」あるいは「学校（生徒）の実態に応じた授業の展開」を各研究員で実践し、「生徒による授業評価」を実施した。その後、研究員全体で検証授業に向けた「生徒による授業評価」の項目を検討し、各科目とも検証授業を行った。その結果、「知識」が増え「理解」が進んだという項目の肯定的回答が8割以上となったなど、科目横断的に「主体的に考える力を培うための個に応じた指導」に対する生徒の率直な感想・意見が集められた。

2 研究の課題

(1) 中学校との連携

研究の過程で、「中学校ではどのような授業を実施しているのか。」という疑問が出された。しかし、共通キーワードとした「東京」「1905」に関連する事項は、中学校社会科においてどのように取り扱われているのか、などの調査は不十分のまま指導案は作成された。「生徒一人一人に応じた授業展開」を目指すためには、中学校での社会科教育について高等学校の教員が一層の理解を深め、高等学校入学直後から、一人一人の生徒がどのような社会科の授業をうけてきたのか、を調査・研究していく必要性を感じた。

(2) 各学校との広範な連携

主題設定の理由でかかげた「各学校が自校の課題や特性をしっかりとらえるとともに、教職員がその課題や特性を共有し、生徒一人一人に応じた授業展開をすることで指導方法の工夫と共有化を図ることができる。」という思いは研究の過程でさらに強くなった。今後は「授業研究ネットワーク“まなび”」や「東京教師道場」に参加しての研さん、特色の異なる高等学校に勤務する地理歴史科・公民科教員との交流だけでなく、校内における公開授業や研修会等

を活用して他教科とのカリキュラム内容の連携についても研究を進めていく必要がある。

(3) 地理歴史科と公民科の連携

地理歴史科と公民科との連携を考えるにあたり、政治経済の「日本経済の発展」という単元を取り上げてみたい。時間的な「1905年」を意識すると、勢力均衡 (balance of power) における国際政治の視点や市場競争といった国際経済の視点、帝国主義、不平等条約改正と特許制度などの国際法に関する題材が考えられる。空間的な「東京」では、住民自治や地方自治の視点から東京の過去・現在・未来を比較、立法・行政・司法の三権にマスコミを加えた権力が一極に集中していった首都機能の在り方について学習が可能であろう。その中で、「東京」を切り口とした課題追究学習をあげたい。地方自治の視点から見た「東京」の内部での経済格差や、「帝都（首都）＝東京」としての国家建設、「東京」の国際政治や国際経済上の位置付けなどを比較対照しながら取り上げることで、一面的でなく主体的で広い視野に立った政治・経済・国際関係についての知識と理解を深めることになる。それが現代の社会について主体的に考察させることにつながり、社会の有為な形成者として必要な公民的な資質の向上にもつながると言える。

(4) 地理と歴史（日本史・世界史）との連携

地域変容の様子を地図等を利用して学習することは、地理的な見方・考え方の養成という地理教育の目標を達成するために極めて有効である。また、過去の地域の状況を踏まえ、現在までの地域変容をとらえるために、歴史的な視点からの分析を伴う学習は必要である。ただし、地理において学習の主要テーマとなるのは、現在の地域に対する理解・認識であり、その補完的な要素として歴史的な内容が活用されることが多い。歴史的資料や成果の地理教育への導入・活用には、このような理由から限界があり、本研究において歴史グループとの連携を十分に進めることができなかった原因の一つとなった。今後は、共通テーマを設定した上での共同研究を進めていく必要がある。両者の有効的な連携が図られれば、生徒の学習に対する興味・関心をさらに喚起させることが可能になり、学習効果をあげることにもつながってくる。例えば、地誌分野の学習においては、国家や地域の総合的な理解が必要となるため、歴史的側面をとらえる必要が当然出てくる。このとき歴史教育における成果を有効的に活用・導入できれば、広い視野に立った国際理解・地域理解を達成することができるものと考えられる。

3 主体的に考える力の育成と個に応じた指導について

本研究では、「生徒が主体的に考える力の育成」の指導の工夫と「個に応じた」指導の工夫は一定の成果をみたところである。しかし、生徒や学校の実態に沿った内容において、生徒が主体的に考えるための学習場面と個に応じた指導場面を関連付けた研究成果は検証授業等を通して明確なものが出せなかった。この課題は、教員の授業に対する取り組み姿勢や授業手法を基本として、教員が「生徒にとって何が必要なのか」「生徒一人一人に教員の指導観や研修成果を還元する」ことを考えて授業の改善・工夫を進めているかにかかっている。生徒一人一人と常に向き合いながら授業運営を進めていくとともに、時代の要請や社会の変化に常に対応しながら授業の工夫・改善を進めていく姿勢が求められている。本研究ではそれらを総合的に考察するに至らなかったが、今後の各学校における授業改善の推進や校内研修などの研究テーマとして取り上げていただくことを提案する。